長岡京跡左京第 677 次発掘調査報告書

2023 年 6 月

株式会社　地域文化財研究所

例　言

1．本書は、京都市伏見区羽束師菱川町 545 番地他において、株式会社翔コーポレーションが計画された宅地造成等の工事に伴い、株式会社地域文化財研究所が同社より委託を受け実施した発掘調査の報告書である。(京都市番号：22NG384)

2．上記の調査は、宅地等造成範囲の内 126 ㎡を対象として令和５年３月 27 日から４月 19 日まで現地調査を行った。また同年４月 20 日～６月 30 日までを整理期間とし、株式会社地域文化財研究所京都支所において整理作業を実施した。

3．本遺跡の現地調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の検査・指導を頂いた。

4．上記事業に関する発掘調査は江﨑周二郎が担当し、須藤歩、北川翔瑛が補佐した。現地作業、測量については、やましろ文化財株式会社から協力を得た。

5．本書掲載の遺物整理作業は江﨑、須藤、阪田恭子が行った。

6．本書の執筆は地域文化財研究所所長福永信雄の指導のもと、江﨑が行った。

7．報告書作成に際し、下記の方々にご指導、ご助言、ご協力を頂いた。記して謝意を表します。
赤松佳奈、石山淳、黒須亜希子、小池寛、清水早織、西森正晃、野島稔、山内紀嗣（敬称省略･五十音順）

8．本書作成にあたり、以下の文献を参考とした。

伊藤潔・網伸也 2011「67　長岡京左京四条四坊・五条三坊」『昭和 55 年　京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所
馬瀬智光 2014「Ｖ－10　長岡京左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡　№.34、№.138」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 25 年度』京都市文化市民局
江﨑周二郎ほか 2022『長岡京左京四条三坊十四町跡　第 645 次　発掘調査報告書』(株) 地域文化財研究所
梶川敏夫 1994「Ⅷ　長岡京左京四条三坊跡　№.88」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成５年度』京都市文化観光局
京都市埋蔵文化財研究所編 1977『長岡京跡発掘調査報告－京都市立小学校分校・中学校分校新設に伴う調査－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告 2
黒須亜希子 2017a「Ｖ　長岡京跡左京第 585 次（四条三坊十三町跡）・羽束師菱川城跡（１）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局
黒須亜希子 2017b「Ⅵ　長岡京跡左京第 586 次（四条三坊十四町跡）・羽束師菱川城跡（２）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成 28 年度』京都市文化市民局
佐藤亜聖ほか 2015『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第 561 次調査）宅地開発に伴う発掘調査報告書』(公財) 元興寺文化財研究所
出口勲 2003「長岡京左京四条四坊」『平成 12 年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所
奈良国立文化財研究所編 1976『平城宮発掘調査報告　Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報 26
日本中世土器研究会編 2022『新版　概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
堀大輔 2010「Ｖ－10　長岡京左京四条四坊三町跡　№.18」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成 21 年度』京都市文化市民局
百瀬正恒 1986「長岡京の土器」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに・・1
Ⅱ　遺構・・・3
Ⅲ　遺物・・・8
Ⅳ　まとめ・・12

挿 図 目 次

図１　調査地周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
図２　長岡京条坊推定復元と調査位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
図３　第１調査区平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
図４　第２調査区平面図・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
図５　第３調査区断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
図６　第３調査区平面図・遺構断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
図７　長岡京期の遺構出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
図８　第６層整地土出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図９　包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
図 10　調査地全体図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

表 目 次

表１　既往の調査一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

図 版 目 次

図版１　遺構
　１．調査前風景（北西から）
　２．第１調査区全景（西から）
　３．第２調査区全景（東から）
図版２　遺構
　１．第３調査区全景（南から）
　２．第３調査区東側拡張部（南から）
　３．焚き火跡（東から）
　４．SK08 土層断面（西から）
　５．第１調査区深掘り断面（北から）
図版３　遺物
　１．SD01 ～ 03 出土 土師器（１～４、７、51）・須恵器（８、９）・黒色土器（６）・骨片（50）
　２．第６層整地土出土 土師器（13、14、52 ～ 67）・須恵器（68、69）
図版４　遺物
　１．SD01（11）・SD03（10）・焚き火跡（12）・第６層整地土（70）出土 製塩土器
　２．焚き火跡出土 土師器（71、72）須恵器（73）
　３．焚き火跡出土 土師器杯
　４．包含層出土 土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器・瓦
　　第２層（17）第３層（18、19、78）第４層（75）第５層（76、77）第６層（15）
　　第７層（16、74）

Ⅰ はじめに

1．調査に至る経過

調査地は京都市伏見区羽束師菱川町545番地他に所在する。当地における宅地、道路、公園等の造成に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）により試掘調査（22NG384）が行われた。その結果、GL-0.5～-0.6mにおいて長岡京東三坊坊間東小路に伴う東西両側溝、東三坊大路東側溝、四条条間小路南側溝が検出された。このため宅地等造成範囲の内、遺構が保護されずに破壊される道路部分を対象として、発掘調査の実施が指導された。

調査は開発者の株式会社翔コーポレーションの委託を受け、株式会社地域文化財研究所が実施した。

2．位置と環境（図1・2）

調査地は桂川の右岸から西に約1.6km地点の沖積低地に位置し、地表面の標高は約11.4mである。また調査地の東に、農業用の幹線用水路として整備された西羽束師川が南北に流れる。かつては水田が一面に広がっていたが、1963年の名神高速道路開通以降宅地開発が著しく進み、現在では調査地南側は住宅地が広がっている。調査地は長岡京の条坊復元における左京四条三坊十四町及び左京四条四坊三町に相当し、東三坊大路、四条条間小路が通る地点である。また調査地の南側には、室町将軍家の家臣である西岡衆の居城と目される羽束師菱川城推定地がある。

調査地周辺の既往の調査成果として、調査地東側では、昭和51年12月～昭和52年3月に財団法人京都市埋蔵文化財研究所（以下、京都市埋蔵文化財研究所）が実施した第9次調査発掘調査において、長岡京期の掘立柱建物や柵列、条坊関連の溝が検出されている他、古墳時代や平安時代の遺構や遺物が確認されている。同研究所が調査地南側で実施した平成5年度試掘調査（93NG442）では、長岡京東三坊大路西側溝や平安時代後期の井戸が確認されている。調査地南西では、平成25年5～6月、平成26年4～5月に公益財団法人元興寺文化財研究所によって行われた発掘調査（12NG289）において、四

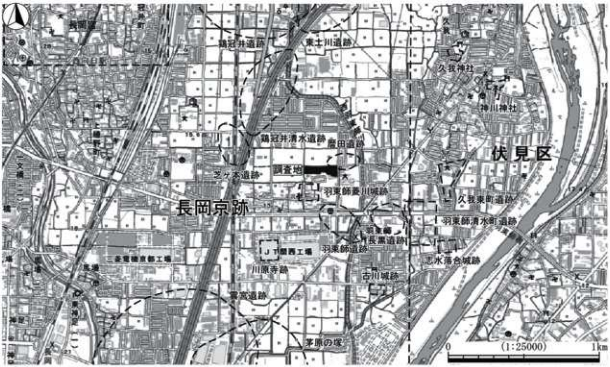


図1 調査地周辺遺跡分布図

表１　既往の調査一覧

調査番号	調査機関	調査事由	面積（㎡）	遺構・遺物	調査機関	文献
第９次調査	1976/12/25 ～ 1977/03/31	学校建設	7，200	古墳後期：古墳 長岡京期：掘立柱建物・柵列・溝 平安中期：河川 出土遺物：弥生土師器・土師器・須恵器・陶器・黒色土器・瓦・製塩土器・土馬・石器・宋銭等	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『長岡京跡発掘調査報告』1977 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第２冊
昭和55年公会（80NGSS）	1981/01/14 ～ 1981/05/31	水道敷設	870	古墳前期：溝跡 長岡京期：柱穴	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
平成５年度試掘調査（93NG442）	1993/12/06	共同住宅建設	95	長岡京期：東三坊大路側溝 平安後期：井戸 出土遺物：土師器・須恵器・瓦器	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成５年度 1993
平成12年度発掘調査（00NG106）	2000/06/19 ～ 2000/09/08	学校建設	300	長岡京期：落ち込み・東西溝 平安時代：掘立柱建物・土坑 中世：溝 近世：畦畔・溝・暗渠・水路遺構	(財) 京都市埋蔵文化財研究所	『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』2003
平成21年度試掘調査（08NG466）	2009/02/05	福祉施設建設	38	長岡京期：柱穴・土坑 室町時代：柱穴・井戸 出土遺物：土師器・須恵器・陶器・井戸枠	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度 2010
平成25年度試掘調査（12NG289）	2012/11/01 ～ 2013/11/05	宅地造成	322	長岡京期：柱穴 鎌倉～室町時代：柱穴・溝・溝・土坑	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度 2013
第561次調査（12NG289）	2013/05/07 ～ 2014/05/26	宅地造成	672	長岡京期：四条条間南小路跡遺構・南側溝・柱列 中～近世：淀川域の北・東端 出土遺物：土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・瓦質土器・瓦・土製品・短刀・小柄・漆器・位牌・十駄・塔婆・木簡	(公財) 元興寺文化財研究所	『羽束師淀川域跡・長岡京跡（長岡京第561次調査）』2015
第585次調査（13NG465・469）	2016/01/12 ～ 2016/02/16	個人住宅建設	95	長岡京期：柱列・溝・土坑 平安前期：柱穴 鎌倉時代：柱穴・溝 江戸時代：土取ボケ・井戸・落ち込み 出土遺物：土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶磁器・木器・硯	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度 2017
第586次調査（13NG466・467・468・469）	2016/05/09 ～ 2016/07/05	個人住宅建設	165	長岡京期：柱列・溝・土坑 平安前期：南北溝・耕作溝 室町時代：掘立柱建物・ピット・井戸・東西溝 江戸時代：礎石群・溝・土坑・ピット 出土遺物：土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・硯石・瓦	同上	同上
第645次調査（20NG535）	2021/07/26 ～ 2021/08/25	宅地造成	97	江戸時代：溝・ピット・土坑・池状遺構 出土遺物：土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器・瓦・杭	(株) 地域文化財研究所	『長岡京左京四条二坊十四町跡第645次発掘調査報告書』2022
第677次調査（22NG384）	2023/03/27 ～ 2023/04/19	宅地造成	126	長岡京期：東三坊大路跡・東西側溝・四条条間小路跡・南北側溝・焼き火跡 中世以降：溝・ピット・土坑 出土遺物：土師器・須恵器・黒色土器・磁器・製塩土器・瓦	(株) 地域文化財研究所	本書で報告

図２　長岡京条坊推定復元と調査位置

条条間南小路南側溝や羽束師菱川城に伴う北濠が検出されている他、16 世紀末～ 17 世紀初頭に大規模な盛土が行われた礎石建物が建設されていたことや、17 世紀第二四半期に菱川城の濠の埋戻しが行われていることが確認されている。調査地南西側では、令和３年度に当研究所が行った発掘調査(20NG535)において、前述の礎石建物に関わる大規模な盛土や、濠の埋戻し等の土木工事に伴うと想定される池状の土取坑が確認されている。

３．調査経過

調査範囲は、文化財保護課の指導により、調査地南側に東三坊大路東西両側溝の検出を目的とした東西９×南北４ｍの第１・２調査区を、北東側に四条条間小路南北両側溝の検出を目的とした東西４×南北 13.5m の第３調査区を設定した。試掘調査結果に基づき、はじめに第３調査区を T.P.10.6m 付近まで機械掘削し、シルトが混じる灰色粘土層上面で精査を行った。その結果、四条条間小路南北両側溝と考えられる溝を検出したが、北側溝は検出が調査区北壁際であったことや、その埋土の質から明確ではなかった。続く第２調査区においても、T.P.10.6m 付近で同様の粘土層が認められたため精査を行い、東三坊大路東側溝と考えられる溝を検出した。最後に掘削を行った第１調査区では、T.P.10.8m 付近に長岡京期の土器、礫、炭化物を含む灰色シルト層があり、その上面で東三坊大路西側溝と考えられる溝を検出した。その他、各調査区で上層より切り込まれている中世以降の溝２条、ピット１基、土坑１基を検出した。なお、遺構検出時及び完掘時に、文化財保護課による検査、指導を受けた。

設定した調査区では、第１調査区の東三坊大路西側溝の全容が明らかにならず、また第３調査区の四条条間北側溝は明確ではなかったため、文化財保護課の指導を受け、第１調査区の西端、第３調査区の北端に、溝の有無や幅、方向を確認するための拡張を行った。

写真撮影や図面等の記録を行った後、第１調査区の灰色シルト層を除去し、粘土層上面の精査を行い、調査区の東端に縦横 1.25 × 0.9m、深さ 0.55m の下層確認用トレンチを設けた。

調査は令和５年３月 27 日（月）から開始し、令和５年４月 19 日（水）に終了した。３月 27 日（月）に第３調査区より機械掘削を開始し、続いて第２調査区の機械掘削を行う。掘削の終了した地点からサブトレンチの掘削及び遺構検出を行う。３月 28 日（火）第２調査区及び第１調査区の機械掘削、サブトレンチ掘削、遺構検出を行う。４月３日（月）文化財保護課の検査を受け全調査区の遺構検出状況撮影を行い、撮影後遺構完掘作業を開始する。４月 14 日（金）文化財保護課の検査を受け、全調査区の遺構完掘状況撮影後、断面実測等の記録作業及び１区、３区の調査区拡張作業を行う。４月 18 日（火）全記録作業が完了し、埋戻しを開始する。４月 19 日（水）全調査区の埋戻しが完了し調査を終了した。

Ⅱ　遺 構

１．基本層序（図３～５）

全ての調査区において同様の水平堆積が認められたが、第１調査区では他の調査区に見られない土器、礫、炭化物を含む第６層整地土が認められた。

第１層		現代耕作土。
第２層	10YR7/1	灰白色シルト。極細粒砂混じる。
第３層	10YR6/1	褐灰色シルト。細粒砂混じる。鉄分、マンガンが沈着する。

第４層　5YR6/1　　褐灰色シルト。鉄分が沈着する。上面で鋤溝が確認されている点、瓦器が出土している点から、中世以降の耕作土と考えられる。

第５層　5Y5/1　　灰色粘質シルト。礫を含む。土師器、瓦器が出土した。

第６層　5Y6/1　　灰色シルト。極細粒砂混じる。土器、礫、炭化物を含む。鉄分、マンガンが沈着する。第１調査区でのみ確認された。上面で道路側溝が検出され、また層内より長岡京期の遺物が出土することから、道路整備における整地土と考えられる。

第７層　N6/　　灰色粘土。シルト混じる。鉄分が沈着する。長岡京期の遺構面である。

第８層　N5/　　灰色粘土。

第９層　5PB5/1　　青灰色粘土。

２．遺構（図３～６）

遺構は長岡京跡の道路関連遺構、中世以降の溝やピットを検出した。調査区全体における遺構の総数はピット１基、土坑１基、溝６条である。その他、第３調査区では焚き火跡と考えられる炭化物の堆積が認められた。以下検出した遺構を時代毎に記す。

長岡京期

条坊の道路に伴う側溝を４条検出し、その規模を明らかにすることができた。

SD01（東三坊大路西側溝）

第１調査区西側で検出した、南北方向の素掘りの溝である。断面はＵ字形を呈し、最大幅約2.35m、深さ約0.2mを測る。埋土はN7/灰白色シルトに細粒砂、炭化物、直径５mm大の礫が混じる。埋土内から土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

SD02（東三坊大路東側溝）

第２調査区で検出した、南北方向の素掘りの溝である。断面はＵ字形を呈し、最大幅約1.9m、深さ約0.3mを測る。埋土は上層に5Y5/1灰色極細粒砂～細粒砂、下層にN5/灰色細粒砂～中粒砂が堆積し、それぞれに炭化物が混じる。埋土内から土師器、須恵器、製塩土器等が出土した。

SF09（東三坊大路）

SD01、02の検出により明らかになった。両側溝の内側肩部間の距離から見て、道路幅は約28mである。

SD03（四条条間小路南側溝）

第３調査区で検出した、東西方向の素掘りの溝である。断面はＵ字形を呈し、最大幅約1.75m、深さ約0.2mを測る。埋土は10YR7/1灰白色細粒砂～中粒砂に極細粒砂が混じる。西に向かって北に振れる。埋土から土師器、須恵器等が出土した。

SD04（四条条間小路北側溝）

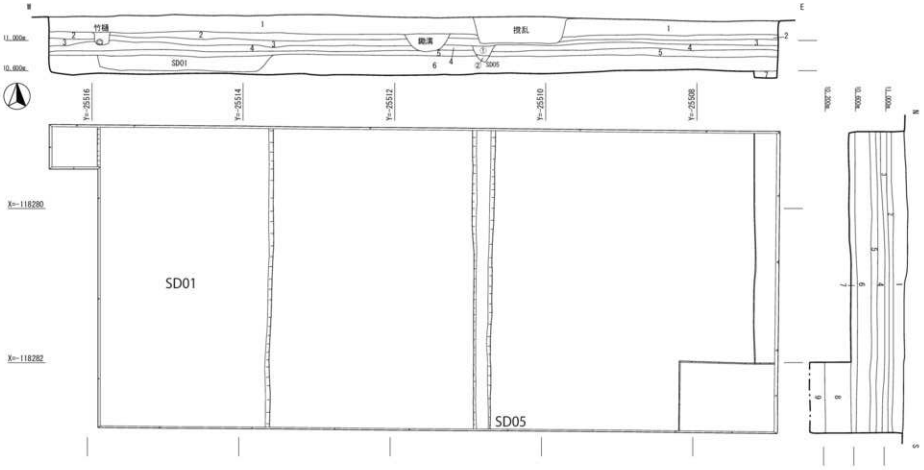
第３調査区で検出した、東西方向の素掘りの溝である。断面はＵ字形を呈し、最大幅1.45m、深さ0.12mを測る。埋土は10YR6/1褐灰色細粒砂である。南側溝同様、西に向かって北に振れる。埋土内から土師器、須恵器が出土した。

SF10（四条条間小路）

SD03、04の検出により明らかになった。両側溝の内側肩部間の距離から見て、道路幅は約11mである。

焚き火跡

SD03の南側肩部付近で検出した。炭化物が塊となって堆積し、直下の土が焼きしまって堅緻

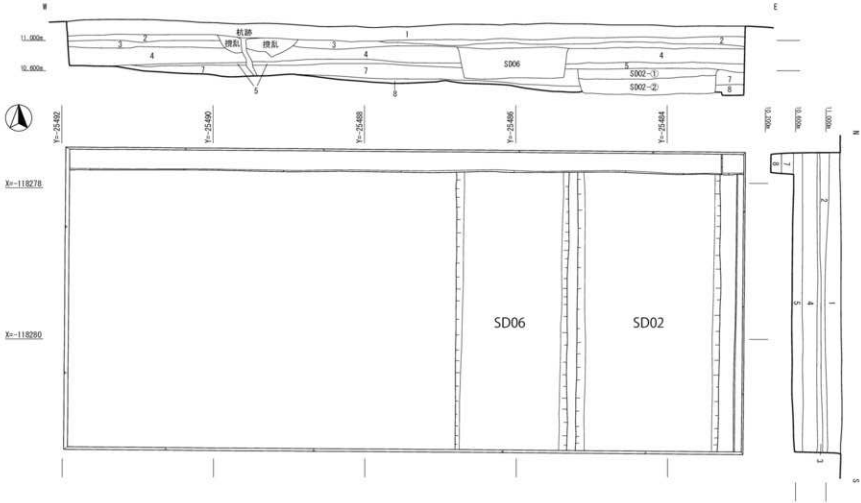


第１層　現代耕作土
第２層　10YR7/1　灰白色シルト　極細粒砂混じる　旧耕作土
第３層　10YR6/1　褐灰色シルト　細粒砂混じる　鉄分、マンガン沈着
第４層　5YR6/1　褐灰色シルト　鉄分沈着
第５層　5Y5/1　灰色粘質シルト
第６層　5Y6/1　灰色シルト　極細粒砂混じる　土器、炭化物を含む　鉄分、マンガン沈着
第７層　N6/　灰色粘土　シルト混じる　鉄分沈着
第８層　N5/　灰色粘土
第９層　5PB5/1　青灰色粘土

SD01　N7/　灰白色シルト　細粒砂混じる　５mm大の礫、炭化物含む　鉄分、マンガン沈着
SD05－①　N7/　灰白色シルト　細粒砂混じる　鉄分、マンガン沈着
SD05－②　N6/　灰色粘土　鉄分、マンガン沈着

0　(1:50)　2m

図３ 第１調査区平面図・断面図

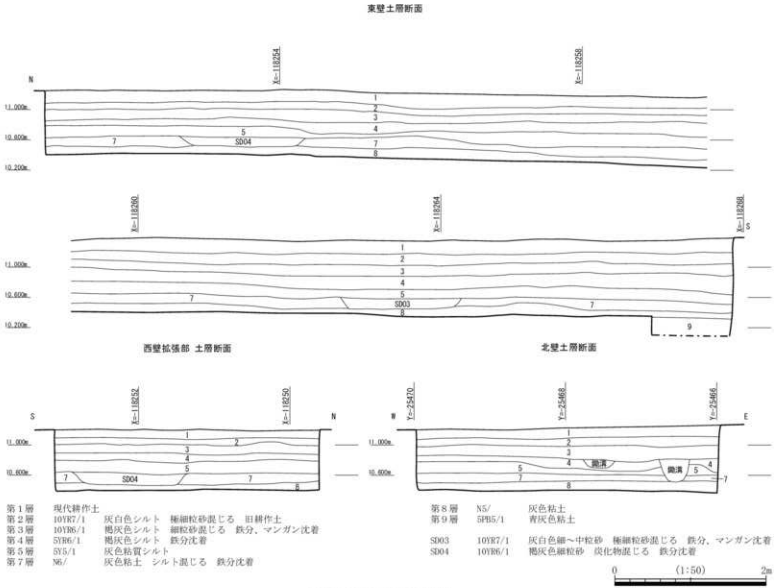


第１層　現代耕作土
第２層　10YR7/1　灰白色シルト　極細粒砂混じる　旧耕作土
第３層　10YR6/1　褐灰色シルト　細粒砂混じる　鉄分、マンガン沈着
第４層　5YR6/1　褐灰色シルト　鉄分沈着
第５層　5Y5/1　灰色粘質シルト
第７層　N6/　灰色粘土　シルト混じる　鉄分沈着
第８層　N5/　灰色粘土

SD02－①　5Y5/1　灰色極細粒砂～細粒砂　炭化物含む　鉄分、マンガン沈着
SD02－②　N5/　灰色粘土　細粒砂　中粒砂混じる　鉄分沈着
SD06　N7/　灰白色　細～中粒砂　炭化物含む　鉄分、マンガン沈着

0　(1:50)　2m

図４　第２調査区平面図・断面図



第１層　現代耕作土
第２層　10YR7/1　灰白色シルト　極細粒砂混じる　旧耕作土
第３層　10YR6/1　褐灰色シルト　細粒砂混じる　鉄分、マンガン沈着
第４層　5YR6/1　褐灰色シルト　鉄分沈着
第５層　5Y5/1　灰色粘質シルト
第７層　N6/　灰色粘土　シルト混じる　鉄分沈着
第８層　N5/　灰色粘土
第９層　5PB5/1　青灰色粘土

SD03　10YR7/1　灰白色細～中粒砂　極細粒砂混じる　鉄分、マンガン沈着
SD04　10YR6/1　褐灰色細粒砂　炭化物混じる　鉄分沈着

0　(1:50)　2m

図５ 第３調査区断面図

になっていたことから焚き火跡と判断した。炭化物とその周囲から土師器片、炭化物の直上から土師器、須恵器、製塩土器等が出土した。

中世以降

各調査区の壁断面と長岡京期の遺構面にまで切り込んでいたものを確認した。壁断面では、第４層上面から切り込まれた溝２条、平面上ではピット１基、土坑１基を検出した。今回は全容を明らかにできなかったが、中世の遺物を含む第４層上面で鋤溝や水路と思しき溝があることから、中世にも耕作等の活動が行われていたことが考えられる。しかし遺構の密度が低く、建物関連の遺構が見られないことから、平成 24 ～ 25 年に文化財保護課が実施した試掘調査(12NG289) で確認された集落の外れの地であったことが考えられる。

SD05

第１調査区で検出した、第４層上面より切り込まれた南北方向の素掘りの溝である。断面はＶ字形を呈し、最大幅 0.3m、深さ 0.2m を測る。埋土の上層は細粒砂の混じる N7/ 灰白色シルト、下層に N6/ 灰色粘土が堆積する。遺物の出土は認められなかった。

SD06

第２調査区で検出した、第４層上面より切り切り込まれた南北方向の素掘りの溝である。断面は台形を呈し、最大幅 1.5m、深さ 0.4m を測る。埋土は炭化物の混じる N7/ 灰白色細粒砂～中粒砂である。埋土内より土師器が出土した。

SP07

第３調査区南側で検出した。平面形は楕円形を呈し、東西 0.3 ×南北 0.3m を測る。埋土は 7.5Y5/1 灰色シルトに細粒砂が混じる。柱根や遺物の出土は認められなかった。

SK08

第３調査区西側で検出した。東西 0.4 ×南北 0.5m の楕円形を呈し、深さ 0.2m を測る。底に 2.5Y6/2 灰黄色粘土が堆積し、植物遺体が大量に含まれていた。遺物の出土は認められなかった。

Ⅲ　遺 物

遺物の出土量はコンテナ１箱分である。条坊の道路関連遺構・焚き火跡・第６層整地土・第７層上面からは、長岡京期の土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦等が出土し、SD06 及び第３～５層からは中世の土師器、瓦器、瓦質土器、瓦、第２層からは近世の国産磁器が出土している。しかし、ほとんどが小破片であった。

１．長岡京期の遺構出土遺物（図７）

SD01（９、11）

須恵器壺　９は肩部～体部である。最大径 18.4cm、残存高 7.6cm を測る。肩部は丸みを持つ。内外面共に回転ナデを施す。体部以下の外面に自然釉が付着する。

製塩土器　11 は口縁部である。口径 7.7cm、残存高 3.7cm を測る。ヨコナデを施し、端部は内外面共にわずかに肥厚する。胎土は径４mm 以下の石英、長石、チャートを多く含む。色調は 10YR8/3 浅黄橙色を呈する。

SD02（１～４、６～８）

土師器皿　１は口径 15.0cm、底径 7.0cm、器高 2.4cm を測る。口縁部は外反し、端部内面は

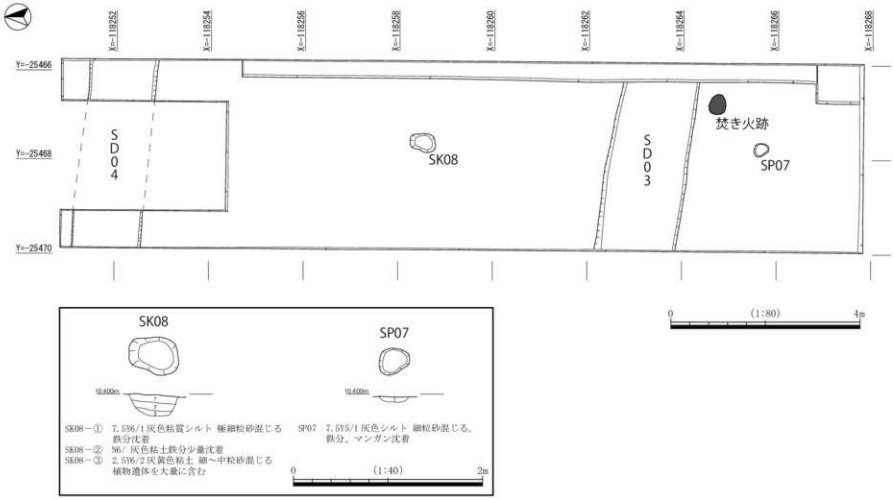


図６ 第３調査区平面図・遺構断面図

肥厚する。底部外面はナデを施し、内面は風化により調整不明である。外面全体と見込みに煤が付着する。２は口径 15.0cm、底径 10.0cm、器高 2.25cm を測る。口縁部は内湾し、端部は肥厚する。底部内面はヨコナデ、外面はユビオサエのちナデを施す。３は口径 16.4cm、残存高 2.4cm を測る。口縁部は強いヨコナデにより外反し、内面に稜が見られる。端部は肥厚する。底部内面はヨコナデ、外面はユビオサエのちナデを施す。

土師器杯　４は口径 12.2cm、残存高 3.4cm を測る。口縁部は厚く、端部は丸く収める。風化のため、調整は不明瞭である。７は杯Ｂの底部で、底径 8.2cm、器高 2.4cm を測る。高台部はヨコナデで接合する。底部は内外とも風化により調整は不明瞭である。

須恵器壺　８は壺の底部である。底径 13.0cm、残存高 2.5cm を測る。回転ケズリのち回転ナデを施す。高台部はヨコナデで接合する。

黒色土器椀　６はＡ類の口縁部である。口径 18.2cm、残存高 3.15cm を測る。口縁部は内湾し、端部は丸く収める。風化により調整は不明瞭である。

SD03（10）

製塩土器　10 は口縁部である。口径 10.8cm、残存高 3.1cm を測る。口縁部は強いヨコナデにより外反し、外面に稜が見られる。体部外面はナデを施す。内面は風化により不明瞭である。胎土は径５mm 以下の石英、長石、クサリ礫を含む。色調は内面は 7.5YR6/6 橙色、外面は 5YR6/6 橙色を呈する。

焚き火跡（５、12）

土師器杯　５は口径 11.6cm、底径 5.5cm、器高 3.9cm を測る。口縁部はヨコナデ、底部内面はナデ、外面はユビオサエのちナデを施す。口縁部に煤が付着することから灯明器としての使用が考えられる。

製塩土器　12 は口縁部である。口径 22.2cm、残存高 4.5cm を測る。厚みが 1.4cm 前後と分厚い。口縁部はユビオサエのち端部にヨコナデを施す。内面は風化が著しいが、工具痕が認められる。体部外面は風化により調整は不明瞭である。胎土は径５mm 以下の石英、長石、チャートを含む。色調は内外面共 5YR5/6 明赤褐色を呈する。

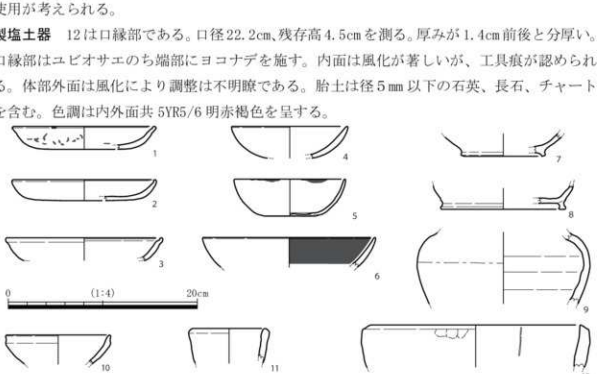


図７　長岡京期の遺構出土遺物

2．第６層整地土出土遺物（図８）

土師器皿　13 は口径 12.4cm、底径 7.0cm、器高 1.8cm を測る。口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。調整は風化により不明瞭である。14 は口径 17.0cm、残存高 2.2cm を測る。口縁部は内湾し、端部は強いヨコナデにより肥厚する。底部は内外面共にナデを施す。

瓦　15 は一枚作り成形の平瓦で、端部が残存する。残存長 13.9cm、残存幅 15.1cm、厚さ 2.2cm を測る。凹面は布目圧痕が残存するが、端部付近はヘラ状工具によりナデ消される。また被熱により焦げが全面に付着する。凸面は５条 /cm の縄目叩き痕が認められる。側面及び端部はヘラ切りを行う。

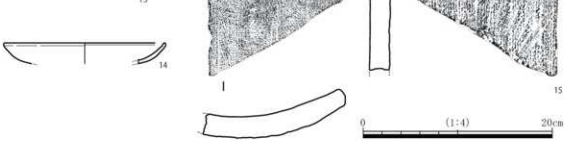


図８　第６層整地土出土遺物

3．包含層出土遺物（図９）

第７層（16）

須恵器蓋　16 は口径 12.8cm、残存高 1.1cm を測る。回転ナデを施す。長岡京期に属する。

第３層（18・19）

瓦質土器火舎　18 は底部付近で、脚部が付属すると考えられる。残存高 5.0cm を測る。下部に小さい突帯を貼り付ける。室町時代前期に属する。

瓦　19 は平瓦で、残存長 12.3cm、残存幅 7.1cm、厚さ 2.2cm を測る。凹面に布目圧痕、凸面に５条 /cm の縄目叩き痕が認められる。側面及び端部は欠損する。古代に属すると考えられる。

第２層（17）

国産磁器碗　17 は染付碗である。口径 11.2cm、残存高 3.6cm を測る。江戸時代に属する。

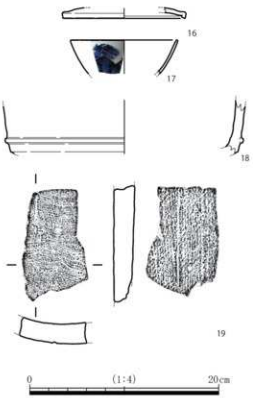


図９　包含層出土遺物

Ⅳ まとめ

今回の発掘調査では、長岡京跡の道路側溝や中世の耕作跡を確認した。

調査地は長岡京跡推定復元における東三坊大路と四条条間小路が通る地点であり、当調査ではそれらの道路側溝と思われる SD01 ～ 04 を検出した。しかし SD01 ～ 03 はいずれも側溝推定ラインから２～３m 前後、SD04 は 4.5m と大きいズレが生じている。

周辺で道路側溝が認められた調査は、東三坊大路西側溝と思われる溝を検出した平成５年度試掘調査(93NG442)、四条条間小路両側溝と思われる溝を検出した第９次調査がある(図２)。

平成５年度試掘調査で検出された東三坊大路西側溝は、推定ラインから５m 前後、そして当調査 SD01 から 2.2m 前後西側に位置する Y=-25517 地点で検出されている。このことから、調査地周辺における東三坊大路西側溝は、北に向かって東に振れている可能性が考えられる。東三坊大路東側溝は平成５年度調査では未検出であるが、SD02 が推定ラインから東側にズレていることから、同様の状況である可能性が考えられる。

SD04 については、第９次調査１トレンチにおいて非常に近い座標で第９次調査－ SD01 が検出されており、その断面形はいずれも平たいＵ字形と近似することから両者の関係は強いと考えられる。より推定ラインに近い座標で検出されている第９次調査－ SD02 は、その断面形がＶ字形であり形態が異なる点や、SD04 以南に第９次調査－ SD02 の形態に類する溝が認められない点から、SD04 及び第９次調査－ SD01 が四条条間小路北側溝であると考えられる。推定ラインから大きく外れる理由は今回の調査では不明であるため、周辺における今後の調査結果を待ちたい。

今回の調査では長岡京期の道路側溝、焚き火跡、第６層整地土から製塩土器が出土している。それらは被熱痕が認められないものが多く、運搬時の塩壺としての用途が考えられる一方、焚き火跡からの出土も認められることから、運搬後（中）に再度塩焼きを行ったことも想定される。また少量ではあるが、土師器や黒色土器が出土していることから、調査地周辺に居住域が存在した可能性も考えられる。

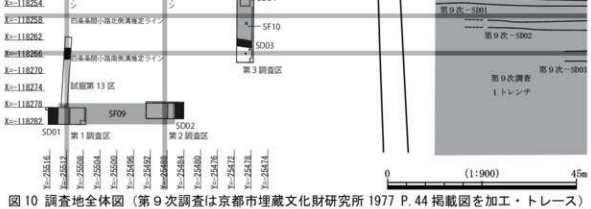


図 10 調査地全体図（第９次調査は京都市埋蔵文化財研究所 1977 P.44 掲載図を加工・トレース）

図版１　遺構

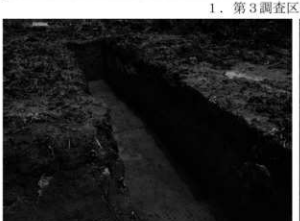
１．調査前風景
（北西から）

２．第１調査区全景
（西から）

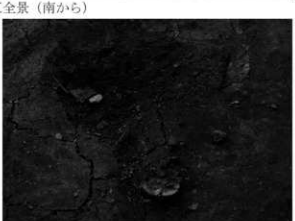
３．第２調査区全景
（東から）

図版2　遺構

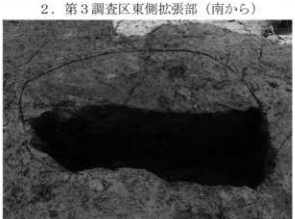
1．第3調査区全景（南から）



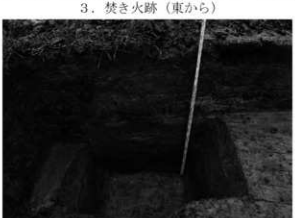
2．第3調査区東側拡張部（南から）



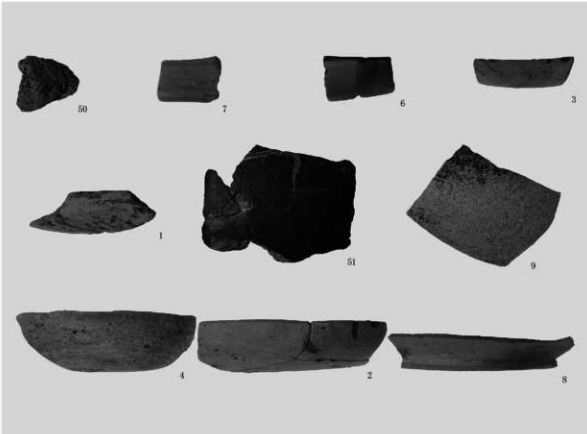
3．焚き火跡（東から）



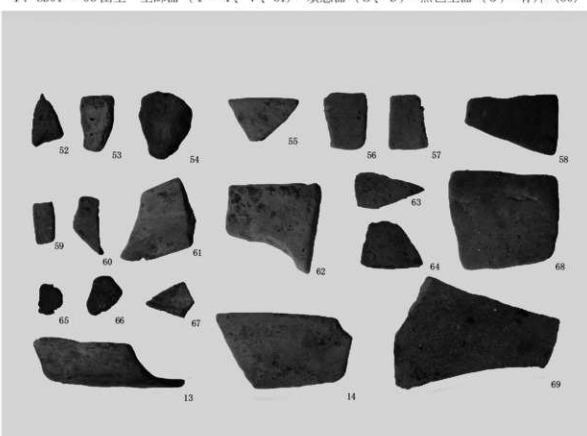
4．SK08 土層断面（西から）



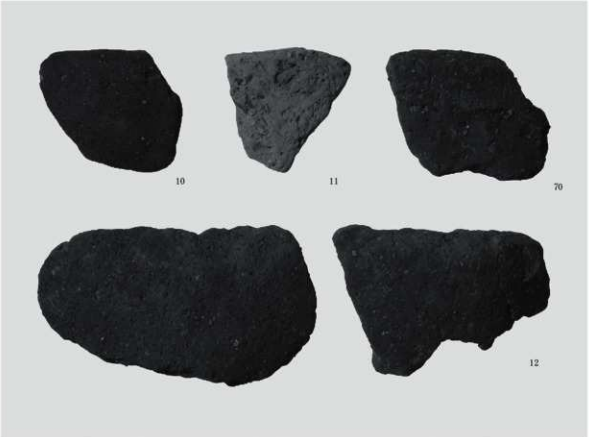
5．第1調査区深掘り断面（北から）



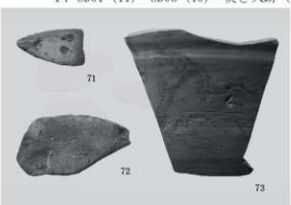
1．SD01～03出土　土師器（1～4、7、51）・須恵器（8、9）・黒色土器（6）・骨片（50）



2．第6層整地土出土　土師器（13、14、52～67）・須恵器（68、69）



1．SD01（11）・SD03（10）・焚き火跡（12）・第6層整地土（70）出土　製塩土器



2．焚き火跡出土　土師器（71､72）須恵器（73）

3．焚き火跡出土　土師器杯

4．包含層出土　土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・磁器・瓦
第2層（17）第3層（18、19、78）第4層（75）第5層（76、77）第6層（15）第7層（16、74）

報告書抄録

ふ り が な	ながおかきょうあとさきょうだい677じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	長岡京跡左京第677次発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	江﨑周二郎
編 集 機 関	株式会社　地域文化財研究所
所　在　地	〒578－0941　大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号　TEL　072－968－7321
発行年月日	令和5年(2023) 6月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京跡（ながおかきょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく）羽束師菱川町（はづかしひしかわちょう）545番地他	26109	3	34度56分1秒	135度43分16秒	令和5年3月27日～令和5年4月19日	126㎡	宅地造成

所収遺跡名（ふりがな）	種　別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（ながおかきょうあと）	都城跡	長岡京期	道路 溝	土師器、須恵器、黒色土器、磁器、製塩土器、瓦	

長岡京跡左京第677次発掘調査報告書

令和5年6月30日発行

編集・発行　株式会社　地域文化財研究所
〒578－0941　東大阪市岩田町1丁目17番9号
TEL　072－968－7321

印刷・製本　株式会社　地域文化財研究所